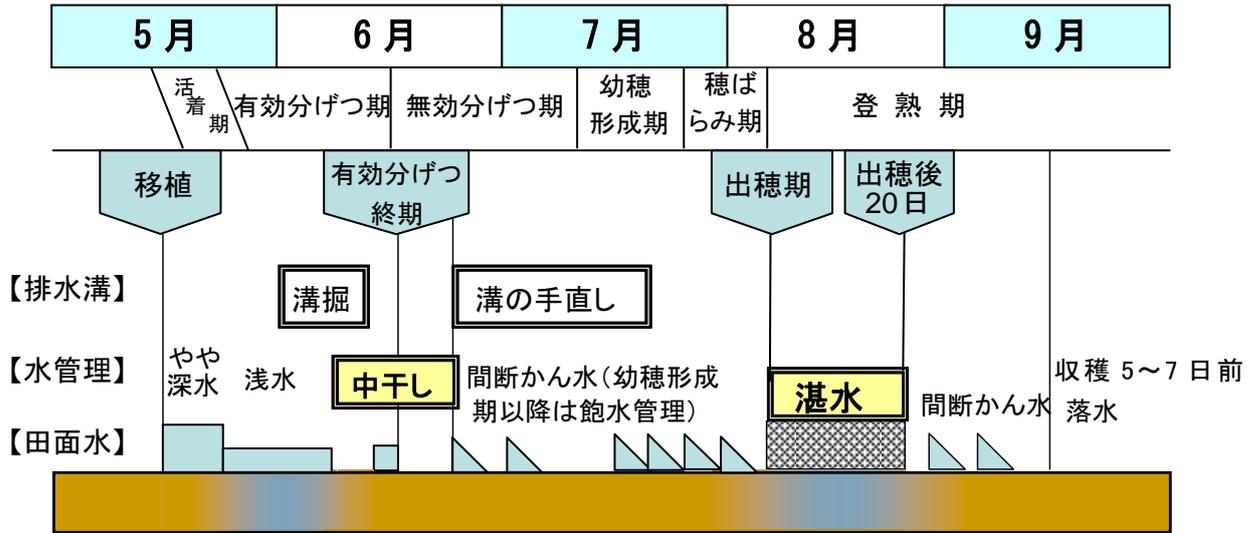


水管理について

水稻の水管理方法は生育ステージによって異なり、その基本的な考え方は次のとおりです。

<水管理のイメージ>



1. 活着期

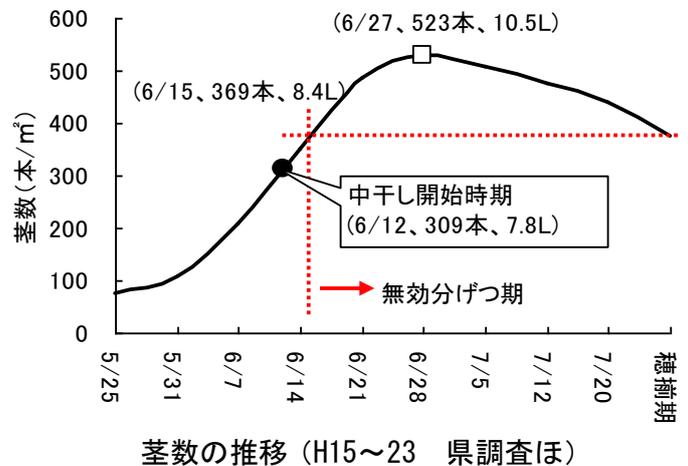
稚苗移植では、田植後の植傷みを防ぎ、湛水による保温効果を高めるため、やや深水とします。ただし、急激なかん水は、浅植えされたものを浮苗にする恐れがあるので、ゆるやかにかん水し、苗が水没しないように注意してください。

また、温かい日中は、浅水にして地温を高めて発根を促します。しかし、低温時の浅水や落水はかえって地温を低くするので避けてください。

2. 分げつ期

浅水管理により水温、地温の上昇に努め、初期生育の促進をはかってください。また、昼夜の水温較差が大きいと分げつ発生が促進されるので、昼間止水、朝夕かんがいを重点に進めてください。

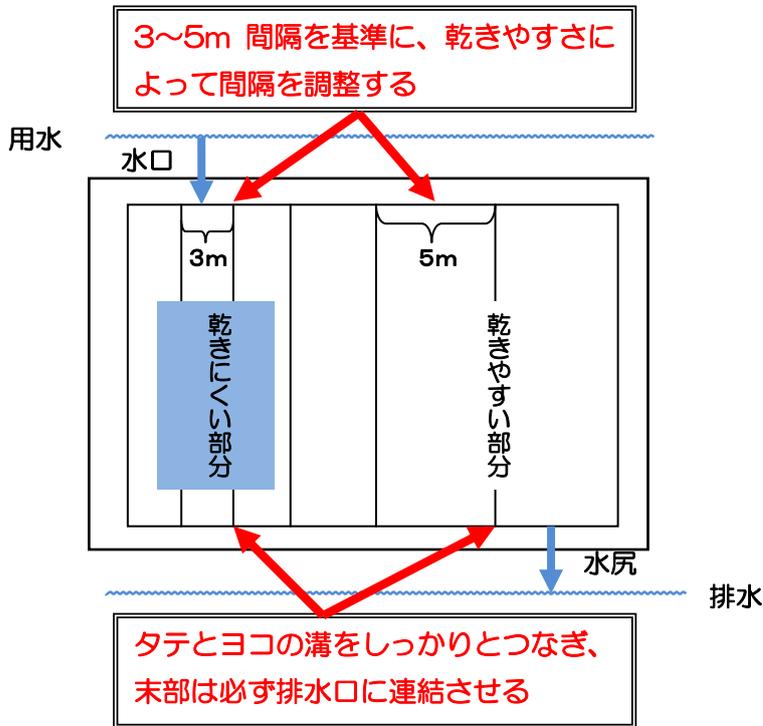
なお、稲わらが多量に鋤込まれたほ場や地下への水はけが悪いほ場では、気温の上昇にともなって根の生育が阻害されるので、軽い田干しや水の入れ換えを随時おこなってください。



なお、溝掘りは事前に軽く田干ししたうえで、6月上旬までに遅れないよう実施し

てください。

<効果的な溝掘り>



3. 中干し

(1) 中干しの効果

中干しは、田植後1か月を目安に実施すると、土壌の還元化による硫化水素や有機酸の発生を抑えることができます。本田を酸化的条件とすることで、根腐れを抑制し、稲の直下方向への根の伸張を促進するとともに、無効分げつの発生を抑制します。

さらに、田面を硬化させることで、登熟後半まで湛水しても収穫作業が円滑におこなえます。

中干しが不十分であると、茎数過剰となり、倒伏や白未熟粒の発生につながります。また、根張りが弱く田面が柔らかいまま登熟期となったうえ、収穫作業のために早期落水すると、登熟後半に稲体の活力低下を招くことになります。

(2) 中干しの仕方

中干しは、田植えの約1か月後を目安に実施します。(2葉以上ある茎が平均して20本以上になった頃)

ただし、中干しの期間、程度は土壌条件、生育状況や天候などによって異なります。また、地下水位の高い地帯や伏流水のみられる地帯では、個別に中干しをおこなっても効果が上がりにくいので、地域ぐるみで集団的に中干しを推進することが大切です。

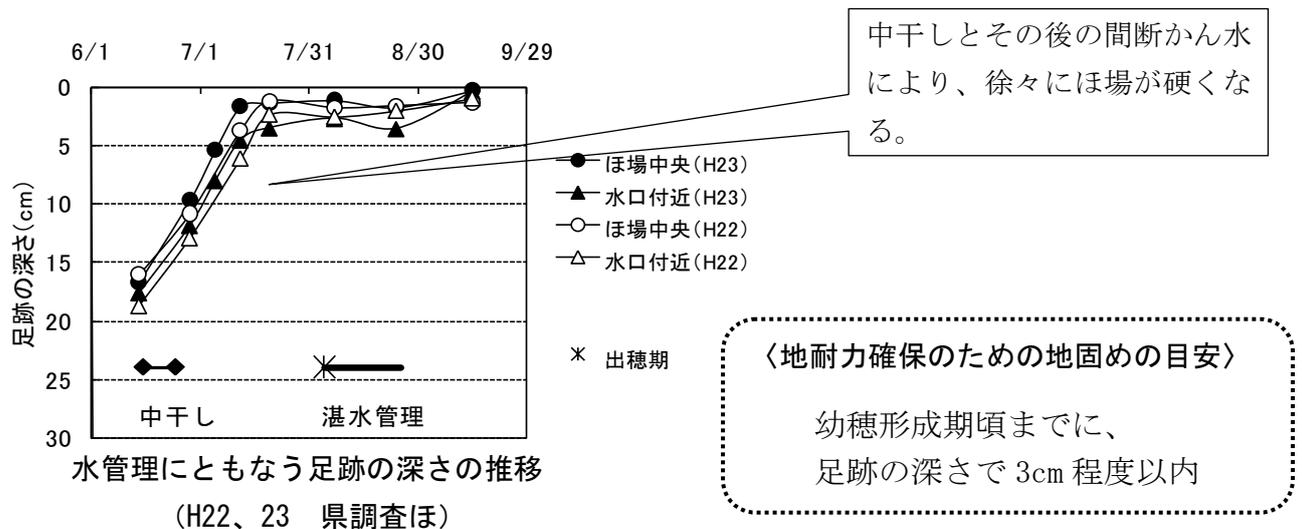
【土壌条件と中干しの程度】

土壌条件	中干しの程度
普通乾田（標準）	3～5 日間隔で田面に小さい亀裂が入る程度に干す
水はけの良い田 （砂質浅耕田）	2～3 日間隔で弱めに干す（溝に水が少し残る程度）
水はけが悪い田 （半質田・粘質田）	5～7 日間隔で強めに干す（長靴が沈まない程度）

4. 幼穂形成期頃の水管理

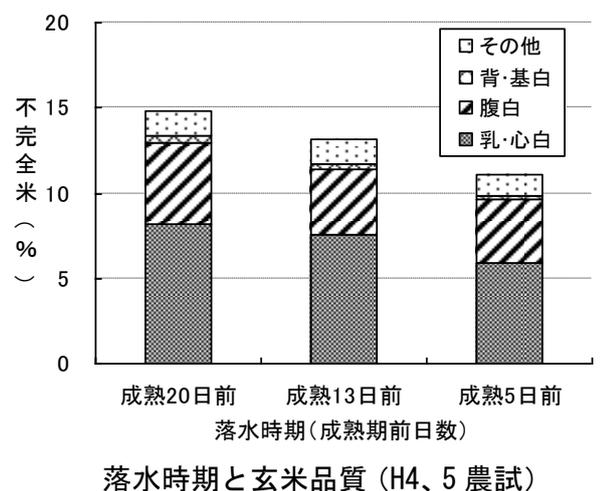
中干し後は、間断かん水をおこない、収穫期に向けて地耐力の向上に努めてください。

穂ばらみ期（出穂の 10～7 日前）から出穂期にかけて稲体の水分蒸散量は最大となり、酸素の消費量も最大となるので、この時期は土壌が水分不足にならないように、また酸素供給も兼ねて、適切な間断かん水をおこなってください。



5. 登熟期の水管理

近年、登熟期間が高温で推移する中で、水持ちの良くない砂質土壌を中心に水分不足のほ場が見られ、しばしば白未熟粒や胴割粒の発生を助長しています。また、玄米へのカドミウムの吸収を抑制するためにも、出穂期から登熟最盛期に当たる出穂後 20 日間は、ほ場の水を切らさず、2～3 cm 程度の湛水状態を保つことが重要です。



また、その後も刈り取り 5～7 日前までは、土壌条件に応じて適正な水分が確保されるよう間断かん水を行い、胴割粒の発生を防止してください。

登熟後半まで幹線用水を確保し、地域内で計画的に活用してください。

参考：水稲・大豆・大麦栽培技術指針